

学名(ラテン語)のカナ表記についての試論

辻野匠¹⁾

1) 層序学者 taphonomy@ni.aist.go.jp

キーワード：ラテン語, 学名, カナ書き(カナ表記), 振假名

この考察は地質ニュース2010年11月号(第675号)に掲載された文章を、^{とこしへの}常陸假名遣(いはゆる旧仮名*)・漢字を書寫體[†]に近い字形で表記したものである。引用に際しては下記原典にあたること。辻野匠(2010)学名(ラテン語)のカナ表記についての試論。地質ニュース, vol. 675, p. 61-70.

1. はじめに

学名はラテン語で書かれるが、学名に^よ呼び方(この「よむ」は読解ではなく呼称なので「呼む」と宛てる)やカナ表記(カナ書き)を與へるのはけっこう難しい。理由の1つは決まった発音がないことにある。現代語であれば、現地での発音に近い転寫といふ方法が一般にとられるが、ラテン語では不可能である。ラテン語は科学技術のみならず、西歐世界全體の基礎であるが、ラテン語を母語として修得した人はをらず、現地音が存在しない。逆に西歐世界の基礎となったために、それぞれの言語(英国やフランス, イタリアやドイツ, スペインなど)にあはせたラテン語の呼び方がある。

ラテン語のいろいろな呼び方の事例について、古代ローマ世界でもっとも著名な人物 Julius Caesar の呼び方を例にあげよう。なほ、各言語の音はカナでは到底表記できないのではあるが、読者の便宜を図ってカナ書きすると次のやうになる。

この人物、古典ラテン語(ローマ時代の発音を再現したもの)ではユーリウス・カエサル[†]のやうに呼ばれるが、英語ではジュリアス・シーザー、フランス語ではジュール・セザール、イタリア語ではジュリオ・チェザレ、ドイツ語ではユリウス・カイザー、スペイン語ではフリオ・セサルとなる。日本語では、時に古典語風のユリウス・カエサルといふカナ書きもなされるが、英語風のジュリアス・シーザーのはうも使はれる。

このやうに、ラテン語の呼び方をめぐっては

*学術的には歴史的假名遣と呼称されるものである。ここでは diachronic orthography の譯語として「とこしへの假名遣(常陸假名遣)」といふ呼称を提唱する。diachronic とは時間を越えて通じる(通時的)といふ意味である。「とこしへの假名遣」は常し方(時を越えた場)の假名遣の謂である。

[†]清朝正字體である康熙字典とは異なり、唐代に完成された楷書の正體

ろいろな方法が亂立した状態で、それぞれの現代語においては體系化されてゐるが、世界的に統一されてはゐない。當然ながら日本においても定まった方法がなく、いろいろな呼び方が混亂して用ゐられてゐる。地質標本館・博物館などで、一般市民、特に学童へ普及するためには、どう呼ぶかを示すことが重要である(古くは Fenton, 1937)。しかし、学術論文では学名のみを表記し、呼び方は示さない。そのため、普及者側がしばしば悩む問題である。本稿では、様々な體系におけるラテン語学名の呼び方を概観し、日本で通用してゐる呼び方の法則性を試論した上で、カナ表記としてどうあるべきか検討する。地質ニュース誌上では山田(1978)がラテン語の紹介をして以来の試みとなる。また、本稿の内容を逆に利用することによって、外国人の学名の発音についても見當をつけられるのではないかと期待される。なほ、発音記号については簡単な説明を加へたが、より詳しい説明は小泉(2003)、Pullum ほか(2003)や国際音声学會編(2003)が参考になる。

2. 各言語における呼び方

ラテン語の各言語における発音は第1表のやうにまとめられる(MacGee et al., 1996)。発音には大きな變異があるとはいふものの、かなり多くの文字(27文字中11文字)は共通の発音をしてゐる。

2.1 古典的ラテン語での呼び方

古典ラテン語ではローマ字読みが基本である。母音 a, i, u, e, o はアイウエオのやうに呼び、英語のやうに、エイ、アイ、ユー、イー、オウとは呼

まない。厳密には u は日本語のウよりも口を丸めた(円唇)音だが、カナ書きではウと書く。以下、注意すべき点を列挙する。

b はバ行の頭子音 [b] でほとんど問題がないが、bs, bt といふ綴字の時は ps, pt と無声音化(亂暴に言へば清音化)する。

c は常に [k](カ行頭子音)になる。英仏語では i, e の前の c は [s] になる一般則がある(たとえば, cinema/シネマ/, ciell/空, シエルまたはシエル/)が、古典ラテン語ではさういふ變則はなく、常に [k] である。一方, k は古典ラテン語ではほとんど使はれず, Kalendae(朔日, 英 calendar の語源)などで使用されるのみである。もとのラテン語が k を使はなかつたので、後裔のイタリア語、フランス語、スペイン語及びポルトガル語でも k は固有語には用みられず、外来語のみに使はれる。

ch はギリシャ語の χ を転寫するために工夫された綴り方でももとのラテン語にはないが、ギリシャ語からの外来語に使ふ(例 chronology)。發音は [k^h] で、右肩の h は帯気音を示し、強く息を吐く [k] の音である。日本語では語頭の力行が [k^h] になることが多いが、音韻として區別しないため力行として表記する。

g は常に [g](ガ行頭子音)になる。英仏伊語では i, e の前では音が變はって英語や伊語では [dʒ](英 Japan の j, チャの子音が近い)、仏語では [ʒ](英 vision の s, 仏 Japon の j, ジャの子音が近い)となるが、古典ラテン語及びドイツ語では常に [g] である。たとえば英語風には geology はジオロジー、pangea(又は pangaea) はパンジアであるが、ラテン語として發音するならばゲオロジー、パンゲアとなる。カナ書きでは、geology は英語風を書くが、pangea はドイツ語のパンゲアが通用してゐる。後述するが、カナ書きではいろいろな言語の呼び方が混同して使はれてゐる。

j は常に [j](ヤ行の頭子音)になる。英仏語とは違ふ。英語では [dʒ], 仏語では [ʒ] となる。たとえば、ローマ神話の最高神であり、木星の謂れにもなつてもゐる Jupiter は、英語ではジュピターのやうに發音されるが、古典ラテン語では、ユピテルとなる。なほ、古典時代には j の文字はなく、i の字が母音の [i](イ)も子音の [j] も表してゐた。たとえば、Jupiter は IVPITER と綴られてゐた(v については後述)。

ph も ch と同じで、ギリシャ語転寫用(φ)にエ

夫された綴り方で、ギリシャ語からの造語に多い(例 philosophy)。發音は強く息を吐く p[p^h] である。日本語では語頭のパ行の音になる。英語など現代西洋語では [f] として發音する。

q は古典ラテン語では常に qu の形で用みられて、[k^w] の音價となる。Aqua はラテン語で水を意味し日本でもよく知られてをり、アクアとカナ書きされることが多い。厳密に古典式に則ればアクワとなる。なほ、現代語ではカンタス航空(Qantas Airways)に献名された Qantassaurus など、qu ではない綴りもある(發音は [k^w])。

s は常に無声音(亂暴に言へば清音)[s]になる。英仏伊語では母音に挟まれた s は有声化(亂暴に言へば濁音化)して [z] の音になる一般則があるが、古典ラテン語では違ふ。saurus はザウルスではなくサウルスとなる。

t は常にタ行の頭子音 [t] で、英仏語では tio や tia といふ綴字で t が [ʃ] になることがあるが、ラテン語は常に [t] である。

th も ch や ph と同じで、ギリシャ語転寫用(θ)である。強く息を吐く t[t^h] で、日本語では語頭のタ行の音になる。英語では [θ](例 think)の發音だが、獨仏伊語では t と同じ [t] の發音をする。

r は巻舌の r で、英語の -er のやうにアーといふやうにはならず、カナ書きではラ行になる(参考: Jupiter, 英ジュピター, 拉ユピテル)。rh といふ綴字はギリシャ語転寫用(ρ)で、強く息を吐く r[r^h] だが、これもラ行としてカナ書きする。

v は常に [w](ワ行頭子音)になる。[v] ではないので注意されたい。たとえば、virus はウィールスとなる(英語ではヴァイラス)。なほ、j と同様、古典時代には u と v の文字の區別はなく、w はなかつた。v の字が母音の [u] も子音の [w] も表してゐた。通行字體は V のはうだった。V は直線的で、石碑に彫るのに好都合だったからかもしれない。BVLGARI は u の音にあへて v を宛てることで傳統的なイメージを醸し出してをり、現在も使はれ得る用法といへる。

x は常に [ks] となる。英語では anxious は [kʃ] だが名詞の anxiety では有声音の [z] になる。しかし、古典ラテン語ではさういふ複雑な變化をせず、常に同じ發音である。

y はギリシャ語からラテン語が借入した語に對して用ゐる。ギリシャ語の υ (Υ) を正確に翻譯するために帝政ローマ時代に作成されたもので、

音價は [y] である. [y] の音はドイツ語の ü のユの音 (例 ^{ヒュッテ} Hütte), 仏語の u の音 (例 ^{コートダジュール} Côte d'Azur) である. ユとカナ書きされるが日本語にはない音である. 日本語のユの音は伸ばすとウになるが, [y] はいつまで伸ばしてもウにならない.

z も y と同じくギリシャ語を正確に翻訳するためにギリシャ語の ζ (Z) から導入された文字で, 音價は [z], [dz], [zd] (wisdom の sd) の音である. 前者はラテン語としての音で, 後二者はギリシャ語としての音である.

ラテン語では母音に長音短音の違いがある. 日本語は長短の違いを区別するので古典ラテン語に近く, 現在の英仏伊西の各言語では長短の違いがないことと対照的である. ヨーロッパ語族の古典語では長短の区別があるものが多い. 古典ギリシャ語もさうだが, 英語も古英語 (6 世紀あるいはそれ以前から 12 世紀の英語. 日本は奈良時代 ~ 平安時代にほぼ相当) では長短の区別があった.

長短の区別は重要で, たとへば日本語でもローマ字で Kozo と書けば, コーゾーさん (孝蔵など) なのか小僧さんなのか去年なのかかわからない. そのため James C. Hepburn のローマ字 (後のヘボン式ローマ字のもとになった, 日本で最初の本格的英語辞典の作成者) では Kōzō, Kozō, Kozo と区別し, 田中館愛橘 (日本式ローマ字の創始者) では Kōzō, Kozō, Kozo と区別した. ラテン語も長短が違ふと意味が違ふので辞書には長短が表記されてゐる. ただし, 学名には明記されてゐない.

2.2 教會式 (イタリア語式) の呼び方

イタリアはローマ帝国の首府であったところで, イタリア語はラテン語の直系の子孫であるが, かなり古典式との間に違いがある. この違いは, 他の言語での呼び方の基礎となるもので, かつ, 教會 (カトリック) で広く用ゐられてゐるため, ラテン語の呼び方において古典式と双璧をなしてをり, 重要である. 以下に簡単に觸れる.

c は i, e など舌が前に出る母音の前だと [tʃ] (チャ行に近い) になるが, a, u, o だと [k] (カ行) になる. ただし ch は常に [k] となる. だからイタリア語風に Chikyu を呼ぶとキキュー (気球?) になる. g は i, e の前だとチャ行になり, a, u, o だとガ行で, gn の綴りではニャ行になる (例. Bologna ボローニャ, Fossa magna はフォッサマーニャ). x

は原則的には [ks] だが, 母音に挟まれると [gz] になる. z はツァ行またはヅァ行である. また, 母音は ae, oe などの二重母音は全て短母音 [e] として呼ぶ. したがって, cae, coe はチェになる. また, フランス語と同じで h は無音である.

2.3 ドイツ語式の呼び方

ドイツの神聖ローマ帝国はその名のとおりローマ帝国を受け継ぐといふスタンスだが, ドイツ語とラテン語は直接の系統関係にない. もちろんどちらも同じヨーロッパ語族だが, 細かく見るとドイツ語はゲルマン語派 (英語やオランダ語が親戚) であるのに對して, ラテン語はイタリアック語派でイタリア語, フランス語, スペイン語及びポルトガル語の祖先となる言語である. 日本は明治・大正期にドイツから科学・技術用語を大量に借入した. ナトリウム (ラテン語 Natrium のドイツ語呼び, 英 Sodium) やメタン (methan 英語風にはメサイン/ミーサイン) など現在でもドイツ語風の呼び方は使用されてをり, 注意が必要である.

c はイタリア語風の呼び方と同じ傾向を示す. e, ae, oe, i, y の前では [ts] (ツァ行の頭子音) になるが, それ以外では [k] のカ行である. ch は Bach (バッハ) のやうに a, o, u の前では [x] (強く喉が鳴るハの音) と呼まれ, i や e の前では Friedrich (フリードリッヒ) のやうに [ç] (ヒ) と呼ばれる. 母音の前の s は常に [z] となる. v は, volks wagen の v のやうに [f] として呼ばれる. w は [w] ではなく [v] の音で呼ぶ. それ以外はほぼ古典式と同じである. 特に g が變化しないことが注意を要す. といふのは c と g は日本語でいへば清音と濁音の違いで, 他の言語では片方が變化してみればもう片方も變化してゐる (第 1 表) ののだが, ドイツ語では g は常に [g] の發音である. また, j や h など (第 1 表), 他の言語では變化してしまつたのにドイツ語式では古典語と同じ發音をするものが比較的多い. 注意すべきは連母音で, eu は [oi], ei は Einstein アインシュタインのやうに [ai] となる.

2.4 フランス語式の呼び方

フランス人はラテン語をフランス語のやうに呼ぶらしく, 大西 (1997) によると「Amis de la prononciation française du latin (ラテン語のフランス語式發音愛好者の會)」があるといふ.

フランス語風の呼び方ではいろいろ注意が必要で全部を網羅できないため、一部だけ記す。子音では、c がイタリア語同様、後の文字によって発音が変る。a, u, o 及び子音の前で [k] となり、i 及び e の前で [s] となる。同じことは g にもいへ、続く母音によって [g] となったり、[ʒ] (ジャ行に近い) と発音し分ける。ch は [ʃ] (シャ行に近い) となる (例 Michel / ミシェル; Chikyu はシキユ (死球?)). j はヤ行ではなく、[ʒ] となる。母音の u は、これまでの古典式、教會式及びドイツ語式は全て [u] の音だったが、フランス語はこれを [y] の音として発音する (古典式の y と同じ発音)。[u] の音は ou といふ綴りが受けもっている。ai は [e], au は [ɔ] で eu は [œ] か [ø], oi は [wa] となる。母音+n/m などの場合、鼻母音として発音し、アクセントがない e は [ə] (曖昧母音。フランス語のカナ書きではウ段の音) となる。また、語末の t が黙字になることがある (例: debut / デビュ)。

2.5 英語風の呼び方

英語風の呼び方は、子音に関してはこれまで述べた方式の中間的な方法で、とりたてて困難ではないが、もっとも困難なのは母音字である。母音字は長母音 (二重母音を含む) として呼ぶ場合と、短母音として呼ぶ場合とで発音が異なる。具體的には a, i, u, e, o は長母音として呼めば [ei], [ai], [ju:], [i:], [ou] だが、短母音として呼めば、[æ] (cap), [ɪ] (skip), [ʌ] (cup), [e] (pet), [ɒ] (top) となる (phonics)。ただし、英国英語か米国英語かによっても発音が異なる母音も多い。長母音は ABCDEFG... とアルファベットを呼ぶ時の呼び方と同じである。開音節 (母音終りの音節) の母音は長母音として、閉音節 (子音終りの音節) の場合は短母音として呼ぶといふ一般規則がある。もともと英語の単語については、どこに音節の区切りがあるのかは綴り字とアクセントから見當がつくやうであるが、ラテン語に對して英語のこの規則を適用しようとする、どこにアクセントがあるかわからないため、どこで音節が切れるのかも見當がつかず、呼び方がわからないことがある (和田, 1989)。英語自體、上述の原則がありながら綴りの呼び方規則が確立してない部分があり、個別に覚える必要がある語が多い。たとへば Polish と polish は同じ綴りであるが発音は違

ふ。二重母音字は例外が多いが、au は [ɔ:], eu は [ju:] となる。

異同の多い c 及び g の音は、c は基本的には仏語と同じだが、g はイタリア語と同じで變則的な傾向を示す。h は [h] として発音し、フランス語やイタリア語とは違ひ、むしろドイツ語のはうが近い。一方、s, v, w, x, z はフランス語と同じである。中間的な方法と述べた次第である。また ch はいろいろな発音がある。church のやうにももとの英語の単語では [tʃ] の音が多いが、charisma, chimera, Christ のやうにギリシャ語からの借入語は [k] となるし、Chicago, chef, machine のやうにフランス語からの借入語は [ʃ] となる。

2.6 各言語における呼び方の背景

ラテン語に對して西歐ではそれぞれの言語に基づいた呼び方があるのは、(1) 同じアルファベットを用いてあるので、同じやうに呼びたい; (2) 自分たちの言語の起源となった古典語であるために、現代語の延長で呼びたいといった理由が考へられる。

(1) については、それぞれの国で教育をする際に、歴史的に現地語に準據した呼び方になってしまふことも関係してあるだらう。(2) は、丁度、日本の古典語を現代日本語の発音で呼ぶのになんの違和感もないのに似てゐる。たとへば奈良・平安時代には「は行」はファ行またはパ行だったと復元されてゐる。だからといって「衣ほすてふ天の香具山」を「コロモポステブ…」とは呼んだりせず、「コロモホスチヨウ…」と呼ぶ。それと同じかもしれない。

ラテン語は後裔ではないドイツ語や英語に對しても多大な語を提供した。これは丁度、漢字が日本や韓国に對して多大な語を提供したのに似てゐる。1つの漢字に對して、中国語 (漢語) での呼び方があり、韓国語での呼び方があり、日本語での呼び方がある。漢語の中でも北京語、上海語、台湾語に広東語などいろいろな呼び方がある。それと同様にラテン語に對しても、イタリア語、フランス語、ドイツ語、英語など多様な呼び方があるのかもしれない。

一方、古典式で呼まうといふのは、漢籍を漢籍が書かれた当時の発音 (たとへば「史記」であれば秦漢時代の上古音、李白なら唐代の中古音) で呼

まうといふのに似てゐるかもしれない。古典ラテン文献を古典学者が研究するのなら、それも一理ある。ただ、古典と関係のない、科学・技術の分野のラテン語を呼ぶ際にそれを適用するのが妥當かどうかといふ問題がある。ところで、ラテン語と中国語とは重要な点で違ふ。中国語の発音は現在もさうだが、過去においても外国人には難しいため、正確に発音できない場合が多いが、古典ラテン語の場合は簡単な音韻體系なので西欧人や日本人が古典式に発音することは技術的には可能である。もっとも例外はあって、英語話者の場合、古典式風に e の長音を発音しようとしても [e:] ができないので、[ei] となることが多いやうだ。たとへば Caesar の 'vēnī, vīdī, vīcī' (来た, 見た, 買った [sic]) の vēnī をヴェイニと呼ぶ。

3. 日本で通用してゐる呼び方

日本で通用してゐる学名ラテン語の呼び方は2種類に大別できる。古典式と英語風の呼び方であり、それぞれいろいろな派生系を含む。

3.1 古典式準據の呼び方

古典式に準據した呼び方は広く日本で通用してゐる。ただし、古典式といっても長短は無視され短音として表記されることが多い。理由の1つには、ラテン語の長短はラテン語辭書を見ないとわからないためと考へられる。更に、学名ラテン語はラテン語といっても現代語からの造語や、現地の地名人名のラテン語化 (tokyoensis, yezoensis, yabiei など) など、長短やアクセントがもともと存在しないものも多く、また、ラテン語ではアクセントと長短は密接に関係してゐるので片方が決まらないうち片方も定まらない(呉・泉(1977)・山田(1978)参照)ため、長短を區別することが難しく、短音としてカナ表記されたのだらう。これは学名ラテン語に限らず、ローマ帝国時代の人物も日本語では長短を無視して短音として表記されることが多い (Julius はユリウスと表記してもいい筈だが、ユリウスと表記される)。それは古典ギリシャ語も同様で、ソクラテスも長短を厳密に表記するのなら、ソクラテースと表記すべきだが、さうなつてゐない。プラトーン(プラトン)も然り。ただ、全面的に短音として統一されるので

はなく、部分的に長音が残つてゐたりと混亂した状態にある(例、ハーデースをハーデス)。それでも、長短を短音に統一する傾向はかなり通用してをり、学名の呼び方を決める際にも無視できないものと思はれる。

古典式準據の呼び方であっても、個々の子音字をどう呼ぶかは必ずしも古典式どほりではない場合がある。たとへば、ph は第1表のやうに古典式では [p^h] (p の帯気音、強く息を吐くパの子音) で、無理にカナ書きすればパ行になるが、古典語以外のヨーロッパの言語では [f] で呼ぶ(第1表)し、その関係もあつて「ファ」行としてカナ書きされてゐることも多い。Coelophysis は恐竜の1つで、真正に古典式ではコエロピューシスとなるが、一般にはコエロフィシスと呼ばれる。th も古典式では [t^h] (t の帯気音) だが、英語で [θ] と呼び、教會式をはじめドイツ式やフランス式では [t] である。ph に倣つて英語風にするならば「サ」行としてカナ書きされるべきであるが、実際は、タ行としてカナ書きされることが多いことから、英語風ではなく、ここは古典式や教會式、ドイツ式などの発音が入り入れられてゐることがわかる。Acanthostega は初期的な両生類で、カナ表記は古典式風のアカントステガの呼称が定着してゐる。v も古典式では [w] でありワ行だが、学名のカナ書きではヴァ行のことが多い。Velociraptor は小型の肉食恐竜で映画「ジュラシックパーク」でも有名になつたが、これはウェロキラプトルではなく、ヴェロキラプトルまたはベロキラプトルとカナ書きされることが多い。Vicarya は日本の中新統からよく産出する巻貝でヴィカリヤまたはビカリヤと表記されてゐる。ウィカリヤといふ表記は管見では知らない。これらの呼び方は古典式準據だが子音だけ現代化(?)した呼び方といへる。なほ、カナではヴァ行で表記してあつても発音はバ行と同じ ([b]) で、ベロキラ…やビカリヤといふ表記も認められてゐる。

古典式準據であっても y を i として呼び換へることが一般に行はれてゐる。これはもともとギリシャ語の y [y] を [i] に呼び換へる場合と、人名地名や外国語の借用などで、もともと y が [i] または [j] の音價だった場合と2種類ある。ギリシャ語の場合は、Tyrannosaurus をテュランノサウルスと古典式の正則通りにカナ書きする場合もあるが、ティラノサウルスといつた y を i に呼び換へ

るカナ書きも多い(この例ではそれとは別に nm のカナ書きにも揺れがある). 恐竜の *Deinonychus* をデイノニクス, *Ankylosaurus* をアンキロサウルス, 魚竜の *Ichthyosaurus* をイクチオサウルス, 軟體動物の *Vicarya* をビカリア, *Glycymeris* をグリキメリスと多数の例がある. 動物だけに限らず, 矽藻の *Cyclotella* もキクロテラ/シクロテラ, *Hyacinthus*(ヒュアキントウス) もヒヤシンス, 植物では-phyllum(葉) といふ語尾の植物が多いが, フィルンと呼ばれることがある. 接頭辭で crypt-(隠れた) といふ語があるが, これもクリプトよりはクリプトのほうがよく使はれてゐる.

人名地名や外国語の借用による y の [i] または [j] への呼び換えについては, たとへば *Mizuhopecten yessoensis*, *M. tokyoensis*(ホタテの類) や *Cervus nippon yesoensis*(エゾシカ) の例があげられる. *yessoensis* や *yesoensis* は「蝦夷産の」, *tokyoensis* は「東京産の」だから, これを杓子定規に y を [y] としユエツソエンシスとかトーキュオエンシスとカナ書きするのはかへって混亂を招くことになるだらう. 混亂を避けるために古典式で呼んだ時に正しい発音になるやう, 学名をつける際に地名のほうをラテン語化する人もゐる. 「蝦夷産の」場合は *jezoensis* になる. 実例としてはエゾマツ *Picea jezoensis* がある. 本稿の範囲を超えるが, 学名の形成法としてはこちらのはうが筋がよいかもしいない. 学名をつける際に地名・人名はラテン語化する慣習があるからである. これに倣ふと, ローマ字表記の Yedo をラテン語化すれば, y はヤ行 [j] なので Jedo となり, 地名から形容詞を作る-ensis を継いで jedoensis となる. ただし, 古典式では正しく呼めるが, 逆に英語風に呼まれてしまってジェドエンシスなどと j を英語の j のやうに呼ばれる危険もある.

また, 全體的には古典式に準據してゐるが, c または g だけ英語式の場合もある. たとへば, アンモナイトに多い-ceras は古典式ではケラスだが, セラスとカナ書きされることのはうが多い. 二枚貝の *Inoceramus* は古典式に書けばイノケラムス(例: 地学團體研究會編(1981)の地学事典)だが, イノセラムス(例: 地学團體研究會編(1996)の地学事典(新版))のはうもよく知られてゐる. 英語式にするならば, 語尾の-mus はマスになるが, イノセラムスとは書かないことから, その方法も古典式の變則に位置づけられる. なほ, -ceras の意味

は角で, アンモナイトが羊の角のやうに見えることから名付けられた. 類語にタンパク質の ceratin があり, 角質に由来してゐる. この ceratin はケラチンとカナ書きされ, セラチンとはならない.

3.2 英語風呼び方

英語式の特徴の第一は開音節と閉音節で母音の発音が違ふことである. 語尾の-us とアス(Julius, ジュリアス)と呼むのがその典型である. この方式では *Dinosaurus* の dino を古典式のディノと呼まずにダイノと呼む. この方法の利点は英語風なので, 英語で発音するときそのままに近い格好で呼めることである. ただし, 英語風の転寫を徹底せずに, 中途半端に英語風にしたカナ書きがある. たとへば *Chaetoceros* といふ矽藻がある. 古典式にはカエトケロスだが, 英語風ではシートセロスとなり, 中途半端にキートセロス, シートケロス, キートケロスといった表記もある. よくあるのが前半が古典風で後半の語尾(-us など)だけ英語風にするものである. ブナは学名では *Fagus*, 英語風ならフェイガス, 古典式ならファークスだが, 折衷的にファークスとカナ書きするのがそれである. *Dinosaurus* であれば, 英語風を徹底すればダイノソーラスになるはずであるが, ダイノサウルスやダイノサウルスと折衷的に英語風発音が混じつてゐることがある.

また英語風カナ書きには, 短母音の o(top, hot, dog) を英国英語風にオと転寫するか米国英語風にアと転寫するか, といふ揺れがある. たとへば *Coscinodiscus* といふ矽藻がある. 古典式ではコスキノディスクスだが, 英語風ではカ(ッ)シノディスクス, コ(ッ)シノディスクスといふ2種類の表記が可能である.

英語風の呼び方では, 二重子音のうち最初の子音が黙字になることがある. たとへば psychology(心理学) はギリシャ語の psychē(心, プシケ) から造語された言葉であるが, psy をプサイと呼まずに, p を黙字としてサイコロジと呼む. 恐竜に, *Psittacosaurus* といふのがゐるが, 古典式準據のカナ書きであれば, プシッタコサウルスのやうになるが, 英語では p が黙字になり, シッタコソーラスといふやうになる. ニセのといふ意味で pseudo- といふ接頭辭があるが, 古典式ではプセウドになるが, 英語風にはシュードと表

記される。折衷的なプシュードといふ表記も見掛ける。翼竜の *Pteranodon* は、英語風には語頭の P が黙字になってテラノドン(さらに言へば e はイなのでティラノドン)になるが、よくある表記はプテラノドンである。ギリシャ語には二重子音の語が多数あり、学名ラテン語でも使っている場合が多い。英語風の表記では二重子音の後半だけしか表記されないで、ほかの言葉と紛らはしくなる。たとへば、ティラノドン(ティラノサウルスのティラノ(「亂暴な」)と共通かのやうな印象(「亂暴な歯」?), 正しくは pter-は翼の意)を與へてしまふ。

4. 考察

古典学者は當然ながら古典式の發音を推奨してゐる(呉・泉, 1977; 大西, 1997; 逸見, 2000; 風間, 2005 など)。これは英語圏の教科書(Wheelock and LaFleur, 2005; Morwood, 1999)でも同じで、古典式の發音を紹介してゐる。一方、学名など学術用語のラテン語は古典文献を表現するための言語ではないし、様々な言語が外来語として混じってゐるため、發音を確立することが困難である。

たとへば、Stearn (1992) は学名ラテン語についての著述で、英語圏には英語風(traditional English pronunciation)と古典式準據('reformed' academic pronunciation)の二種類の呼び方があることを紹介してゐる。前者は園藝家や植物学者によって使はれてをり、後者はヨーロッパ大陸での呼び方(教會式・ドイツ式・フランス式など)に近い利点があるとした上で、母音の長短とアクセントを正しく發音すればどちらの呼び方でも通じるとしてゐる。その上で、どの方法でも、地名・人名などの外来語の發音を定める決定的な方法はないことを指摘してゐる。理想的には外来語の部分は現地語呼びして、ラテン語(+ギリシャ語)の本来語は上の方法で呼ぶことを提案してゐるが、どう呼ぶかわからない、結局、自国語呼びになってしまうといふ問題がある。が、さうであつても大抵の植物学者や園藝家はわかると結論づけてゐる。これらの提言は非常に示唆的である。

まづ、英語風のカナ書きから考察する。英語風はアクセントや音節の認定を確実にできないと發音を決めることが難しい。実際、英語話者であれば誰でもラテン語学名の發音をすらすら決め

得るといふわけでもない。日本人であれば尚更である。たとへば、*Ampelopsis brevipedunculata* といふ学名(ノブドウ)の英語風カナ書きを書けるだらうか? 属名は短かいのでまだ簡単だが、この種小名やうな長い語は英語は苦手とするところで、どう音節を区切るのか、どこにアクセントを置くのかよくわからないだらう。地質学者にはよく知られた *Inoceramus* も發音困難な語の一つである(Fenton, 1937)。甲 in-o-cer-a-mus であれば、イノセレイマスになるが、乙 in-o-cer-á-mus であればイノセレイマスで、丙 i-no-cer-a-mus であればアイノセレイマスとなる(Webster 3rd New International Dictionary(1993)は甲を本、丙を従としてをり、米語内でも揺れがある)。このやうに英語風のカナ書きは音節の認定に困難があり、カナ書きが不可能になる事態が予想される。一方、古典式に準據したカナ表記の場合は、第1表のやうな表に照して前から順番にカナに転寫していけばよい。

また、英語風の表記の場合、track と truck がカナ表記ではどちらもトラックになるやうに [æ] と [ʌ] とを書き分けられないので、閉音節にあたる a と u は同じ母音アで転寫されることになる。これに米国英語の [ɒ] (hot) も加はると、a, u, o の三種類の字母が同じアになってしまう。実際に、ギリシャ語系の語尾-os とラテン語系の語尾-us は英語風に書けばどちらもアスになってしまう違ひがわからない。このやうに英語風のカナ書きには、もとの綴りがわからなくなる、同音異義語になるなどの問題がある。

このやうなことを踏まへると口語として喋るのはともかく、カナ書きとしては英語風の表記は問題があることがわかる。カナ書きを英語風と古典式との端成分に分けた場合、古典式のはうに分がある。次に古典式の派生系について検討する。

古典式のカナ書きは堅牢な體系をもつてゐるが、地名や人名に由来する外来語についても古典式カナ書きを適用するかどうかは判断が分かれるところである。外来語は除外して純粹にラテン語あるいはギリシャ語から形成された学名に関して古典式のカナ書きにする方法がある。ここでは「原則古典式カナ表記」とする。純粹にラテン語あるいはギリシャ語から形成されたかどうかの判定はラテン語やギリシャ語の辭書や学名辭典(Stearn, 1992; 平嶋, 2007 など)を参照してもいいし、経

験ある分類学者であれば見當がつく。それを判別して表記することは学術情報の啓蒙普及する者がすべき貢献といへる。また、古典式を採用するとしても母音の長短を判断するかどうかは選擇の余地がある。完全に古典語であれば辭書を索くなどして判断できるが、学名にありがちな造語について母音の長短を調べるのは不可能な場合も多く、どこまでできるか検討を要す。

一部の子音については現代風に變へた發音を採用する方法もある。これをここでは「現代の子音の古典式カナ表記」とする。対象とする子音は ph, v, y である。ph は [f], v は [v] の發音を採用し、カナ書きはそれぞれファ行とヴァ行となる。また、y は母音としては [i], 子音としては [j] といふ發音で扱ふ。おそらく體系化された学名の表記としてはもともと日本で通用してゐるものと思はれる。この表記法は分野は違ふが化合物の日本語表記についての規則(日本化学會化合物命名小委員會編, 2000)とほとんど同じである。

「原則古典式」及び「現代の子音の古典式カナ表記」では外來語の地名・人名由来の語句については、臨機應變に現地音あるいは日本で通用してゐる呼び方を適用する。たとへば ch は古典語では [kʰ] でカナ書きするならばカ行であるが、ch を [k] とは呼まない綴りから造語された学名もある。日本でいへば、*chishimaensis*(千島産の)や *chichibuensis*(秩父産の)が該當する。これらをキシマエンススとかキキブエンススと呼むのは、正則の古典式としては妥當であっても、日本人に意味を傳へるといふ点では劣る。*yedoensis*(「江戸産の」といった語をユエドエンススと無理に古典式に書く必要はなく、エドエンススと書いたほうが語として通じるためである。ただ、学名のどれが地名・人名由来の語句なのかは、どれが本来語かどうかの判別と同じで、知識を要す。

更に子音は全て英語風の發音にする方法もある。「現代の子音の古典式」の子音に加へて、c, ch, g, j, th, x が対象となる。*Inoceramus* イノセラムスが相當する。ここでは ps, pt を英語風に s, t とするのは保留する。この方法でも母音は古典式のままで英語「式」とはいひがたいが、ヘボン式ローマ字と同じであるので「ヘボン式カナ表記」とする。ヘボン式が英語「式」とはいへないことは、峰のヘボン式ローマ字は Mine であり、英語の^{ミネ}鉦山と同じになる(同様の例は、伊達 Date, 吳 Kure cf.

cure) ことから明らかである。

もちろん、英語風の呼び方にしておいたほうが日本人にとって通じやすい場合もある。*Hibiscus* といふ植物は古典式準據のカナ書きならヒビスクスで、多くの人は聞いたことがないであろうが英語風に書けばハイビスカスであり、広く知られた植物であることがわかる。逸見(2000)はシーザー(Caesar)を例に日本では定着した言葉ほど英語風に呼ばれると述べてゐる。学名でも、ハイビスカスのやうに古典式あるいは教會式・ドイツ式よりも英語での呼び方が定着したものは多い。Ammonite(s) アンモナイト, Belemnite(s) ベレムナイトのやうに-(l)ite(石の意)とした学名は英語風の^{アイト}といふカナ書きが定着してゐる。そのやうなものに對しても一律古典式準據の呼び方を提示するのがわかりやすいかどうかといふ問題がある。河野(1994)が述べてゐるやうに、カナやアルファベットのやうな表音文字であつても文字列が第一義的に示してゐるところは語であつて音ではないので、社會的に通用してゐるカナ表記を無視して原則を押し通すことにも無理がある。

では、社會的に定着してゐるカナ書きがあればそれを採用することにしよう。それでも問題は残る。1つは、ある語が社會的に定着してゐると思ふかどうかは人によって異なり、線引問題になるためである。もともと分類学を修めてゐる人口は少ないため、小さなコミュニティーだけで定着したかどうかを判断することも難しい。更には、ある学名それ自體はまったく知名度がなくても語幹や語尾などの部分部分で見れば、通用してゐる表記がある場合も多い。たとへば *Taxodioxyylon* といふ絶滅したスギ科の樹木がある。日本の古第三系からよく産し、地質標本館でも展示してゐる。これについて一般に通用してゐるカナ書きはないと思はれるので、タクソディオキシロンといふ「現代の子音の古典式」のカナ書きに一見すると決まりさうである。しかし、語幹の xylon だけを見ると、これは樹木といふ意味のギリシャ語で、xylene(キシレン、英語風にはザイリールン), xylytol(キシリトール、英語風にはザイリトール)など広く通用してゐるカナ書きがある。このカナ書きを採用すると、タクソディオキシロンといふカナ書きになるが、taxoのxとxylonのxのカナ書きが違つてしまふ。統一するとタキシディオキシロンになる。しかし、taxoの呼び方は taxonomy のカナ書きのタ

クソノミーのはうが定着してゐる。このやうに社会的に通用してゐる表記を導入しても、あちら立てればこちらが立たずのジレンマに陥りかねない。

学術情報を普及する立場としては古典式準據のカナ表記(おそらくもつとも通用してゐる「現代の子音の古典式カナ表記」)を第一候補として提示しつつ、「ヘボン式カナ表記」にも気を配りながら、括弧書きや註の形で既に知られた別の呼び方を提示していくのがよいのではないだろうか。といっても、スペースの限られた展示板などで両方を並記するのは困難であり、どちらかを優先させなければならぬ。表記の問題には最終的解決はなく、いつまでも問題が残る旨、小泉(1978)は述べてゐる。

5. おはりに

古典式準據のカナ表記は英語風発音との乖離かいりが著しい場合がある。それは古典式の欠点であるが、本来の綴りをなるべく保存する格好でカナ書きされてゐるので本来の綴りを復元することが可能である。英語運用能力との関係でいへば、学名のカナ表記を英語風にするのではなく、綴りから英語の発音規則に照して英語として発音するのが王道だと考へてゐる。なぜなら、カナ書きには表記の揺れがつきまとふが、学名は定義により、揺れがまったくないからである。少なくとも不規則に英語風にカナ書きされたものより古典式の表記のほうが、英語で発音し直す時の困難が少ない。不規則に英語風にカナ書きされたものはもとの綴りを復元できないからだ。

ラテン語の各言語での発音の仕方は、それぞれの言語のアルファベットの呼び方の癖を反映してゐる。これを把握することで逆に非英語圏の話す「訛った」学名や英語の発音の聞き取りに活かせるといふ波及的な効果が期待できる。その目的ではラテン語の後裔のスペイン語とポルトガル語は話者も多く、割愛したのは残念だった。

表記の混乱について可能な解決が少なくとも1つある。それは個々の人が混乱を上まはるだけの知識を身につけることである。本稿がその一助となれば幸いである。

謝辞：黒田耕平氏(琵琶湖博物館当時、動物学)並びに山下太郎氏(学校法人北白川学園、西洋古典学)には原稿を読んでいただき、貴重な助言と

励ましを賜った。

文献

- 地学團體研究会編(1981): 地学事典. 平凡社. 1612p.
 地学團體研究会編(1996): 地学事典(新版). 平凡社. 1852p.
 Fenton, C. L. (1937): Life Long Ago—the story of fossils, John Day, New York, 280p.
 平嶋義宏(2007): 生物学名辭典. 東京大学出版會. 1292+52p.
 逸見喜一郎(2000): ラテン語の話. 大修館書店. 292p.
 風間 喜代三(2005): ラテン語・その形と心. 三省堂. 282p.
 小泉 保(1978): 日本語の正書法. 大修館書店(日本語叢書), 456p.
 小泉 保(2003): 改訂 音声学入門. 大学書林, 237p.
 国際音声学會編・竹林 滋(訳)・神山孝夫(訳)(2003): 国際音声記号ガイドブック. 大修館書店. 320p.
 河野六郎(1994): 文字論, 三省堂, 161p.
 呉 茂一・泉 木吉(1977): ラテン語小文典. 岩波書店. 172p.
 MacGee, T.J., Rigg, A.G. and Klausner, D.N.(ed)(1996): Pronunciation of European Languages in the Middle ages and renaissance. Indiana Univ. Press. 320p.
 Morwood, J. (1999): A Latin Grammar, Oxford, 216p.
 日本化学會化合物命名小委員會編(2000): 化合物命名法(補訂7版). 日本化学會. 132p.
 大西英文(1997): はじめてのラテン語. 講談社(現代新書). 287p.
 Pullum, G. K. Ladusaw, W. A.・土田 滋(訳)・福井玲(訳)・中川 裕(訳)(2003): 世界音声記号辭典(原題: Phonetic Symbol Guide, 2nd ed.1996), 三省堂, 349p.
 Stearn, W.T. (1992): Botanical Latin: History, grammar, syntax, terminology and vocabulary (4th edition). David & Charles, Newton Abbot. 560p.
 和田裕一(1989): ラテン語学名のカナ表記が示唆するもの. 民博通信, 国立民族学博物館. 44, 12-21.
 山田正春(1978): ラテン語と学術用語. 地質ニュース, 286, 37 & 58-63.
 Wheelock, F.M. and LaFleur, R.A.(Riveised)(2005): Wheelock's Latin (6th edition), Collins, 560p.

TUZINO Taqumi: Short introduction to transcription from Latin Linnaean name to Kana scripts

受付日 [2010年4月15日]

字	古典式	ドイツ式	教会式	フランス式	英式	通用
a	[a] ア	←	←	←	[ei æ]	ア
b	[b] バ行	←	←	←	←	←
c	[k] カ行	[ts k]	[tʃ k]	[s k]	←	カ行 ⁰¹ . [サ カ] ²
d	[d] ダ行	←	←	←	←	←
e	[e] エ	←	←	←	[i: ɛ]	エ
f	[f] ファ行*	←	←	←	←	←
g	[g] ガ行	←	[ɣ g]	[ʒ g]	[ɣ g]	ガ行 ⁰¹ . [チャ ガ] ²
h	[h] ハ行	←	無音	←	[h]	ハ
i	[i] イ	←	←	←	[ai i]	イ
j	[j] ヤ行	←	←	[ʒ] ジャ行	[ɣ] チャ行	ヤ行 ⁰¹ . チャ行 ²
k	[k] カ行	←	←	←	←	←
l	[l] ラ行*	←	←	←	←	←
m	[m] マ行	←	←	←	←	←
n	[n] ナ行	←	←	←	←	←
o	[o] オ	←	←	←	[ou ɒ]	オ
p	[p] パ行	←	←	←	←	←
q	[k ^w] クワ行	[kv] クヴァ	[k ^w] クワ行	[k] カ行	[k ^w]	クワ行
r	[r] ラ行*	←	←	←	←	←
s	[s] サ行	[z] ザ行	[z s]	←	←	サ行
t	[t] タ行	←	←	←	←	←
u	[u] ウ	←	←	[y] ユ*	[ju: ʌ]	ウ
v	[v] ワ行	[f] ファ行*	[v] ヴァ行*	←	←	ワ行 ⁰ . ヴァ行 ¹²
w	未成	[v] ヴァ行	?	[w]	ワ行	ワ行
x	[ks] クス	←	[gz ks]	[ks s]	[gz ks]	クス
y	[y] ユ*	←	[i] イ	←	←	ユ ⁰ . イ ¹²
z	[z] ザ行	[ts] ツァ行	[dz] ヴァ行	[z]	←	ザ行
ch	[k ^h] カ行*	[x ç] ハ* ヒ	[k] カ行	[ʃ] シャ行	[tʃ k ʃ]	カ行 ⁰¹ . [チャ カ] ²
ph	[p ^h] パ行*	[f] ファ行	←	←	←	パ行 ⁰ . ファ行 ¹²
ps	[ps] プス	←	←	←	[s] サ行	プス
th	[t ^h] タ行*	[t] タ行	←	←	[θ] サ行*	タ行 ⁰¹ . サ行 ²
cc	[k] カ行	[kts]	?	[s]	[ks]	[カ サ クス]
gn	[gn] グヌ	[ɲn]	[ɲ] ニャ行	←	[ɲgn]	[グヌ ニャ]
sc	[sk] スク	←	[ʃ sk]	[s]	[s sk]	[スク サ]
sch	[sk ^h] スク	[ʃ] シャ行	[ʃ sk]	[ʃ]	[sk]	スク

第1表 ラテン語の各言語別発音比較表. 上段に1文字のアルファベット, 中段にギリシャ語からの借入語に多い綴り, 下段に俗ラテン語以降にできた綴り(しばしば現代語に含まれる)を示した. カナ書きの*は近似的な表記で, 音声学的には明確に違ふことを示す. たとえばファの子音は [f] ではなく [ɸ] であり, ヴァの子音は [v] ではなく, [b] または [β] で, fa をファ, va をヴァと書くのは近似音による代用である. [x|ç] などの | は前後の綴りにより発音が異なることを示す. 通用は本文で述べてゐるやうに混乱してをり代表的なものだけを掲げた. 0. 「正則の古典式カナ表記」. 1. 「現代的子音の古典式カナ表記」. 2. 「ヘボン式カナ表記」. 簡略化のため割愛した表記もある. たとえば r の音が各言語によって様々で一律に [r] とはいへないが, いづれの場合もラ行で受けるため割愛した. 一方で, ジャとチャは戦後の現代仮名遣いでは書きわけないが, ここでは精密化のため書きわけた.